
一部50円です

田舎の母



テレビの画面に大雪警報、舞鶴市、綾部市と流れた。ひとり暮らしをしている母の事が心配になる。家内が電話してみたら、という。すぐに電話をするが、なかなか出ない。いつもの事ではあるが気になる。どこへ行っているのだろうか、降り積もった雪の雪かきでもしているのか。

92歳になる母は、百姓をしながら独りで山奥に暮らしている。どこも悪いところがなく100歳までは生きるだろうと本人も言っている。兄は、その秘訣を裏山の畑にいくために毎日登る坂道だと言う。母は、きれいな空気と水、自家栽培による野菜の粗食が身体によいのだと。私は、気ままな一人暮らしと近所のゲートボール仲間や兄妹の叔父叔母の支えがあるから楽しくらせるのだと考えている。

数年前、ちょうど今頃だった。電話をすると、風邪をひいて具合が悪そうだったので心配になり帰ったら、居間に布団を敷き寝ていた。火の気のない座敷は冷蔵庫のように冷えびえとしていた。風邪熱のためにストーブもつけられず横になっていたのである。さっそく、二台のストーブをつけるが、大きな田舎の家は温まらない。雪がたくさん積もっているわけではないが、底冷えが強かった。「病院にいかな」と言うが、母の弱りきった寝姿からみて車に乗せることも容易でなさそうだった。「寝てたら、よくなるから…」と母は私をなだめる。

京都に住む兄も仕事の都合で明日にならなければ帰れない、と母は言った。40度近い高熱の母をひとり寝かせておくわけにはいかないが、我が家へつれて帰るのも問題だ。遠い道を車に乗せればさらに酷くなる。

生まれ育った家はいつも温かい空間であったが、この時はストーブを燃やしても温まらなかった。ひと気が消えそうになった大きな家は隅々まで冷気が染み渡り氷の世界になるのではないかと思わせる恐怖を感じさせた。ここに居てはいけない、と弱気になった私は考えて母の妹に電話したら、きみちゃんは快く母を引き受けてくれた。おかげで、私は心配から解放されたのであるが、あの時に感じた恐怖は母の病状が思わせたのか。或いは、家に宿る祖先の仏が私に教えてくれたのだろうか。母は周りの人たちや祖先など多くのものから守られ生かされているのかもしれない。

こんな事を思い出しながら夜に再び電話した。珍しく京にいる兄が、母の代わりに出て「雪が凄いから一週間ほど京へ連れて行く」と言った。とりあえず先ほどの心配は消えて安堵した。(嘉)

連載 爺捨て山 36

梵店主

東北大震災から季節が一回りして、また寒い冬がやってきた。福島原子炉は依然として内部の様子が不明で放射能を放出し続けている。

東大出の秀才たちは何を考えているのだろうか。原子力関係に携わった技術者や行政を指揮する官僚たちや政治家など賢いと思われた人たちがいかに無責任でいい加減かという事がよく分かった。

暗記力のみを重視した試験問題をいくらしても現実には起こる課題に対しては無力である。過去の問題をいくら記憶し満点正解するも明日起きる事象には全く役に立たなかった。

小さな時から塾へ行き親子そろって進学熱に浮かされ有名大学に入学することのみに幼少期、青年期を過ぎた人たちは、大人になってもその価値観の世界を抱え続けエリートを目指し続ける。そんな環境下で育った人たちがばかりが日本の中枢にいたのである。おかれている立場が違っても教育を受けた学校は同じ東大であり高校も同様で進学塾も同じである。

彼らの考えの基盤は皆同じである。過去の問題を記憶し過去の問題解決の答えを探していく思考は変わらない。こんな事はコンピュータに任せればよい。賢者は何処にいるのだろうか

《ヒマラヤへの道 27》

ガルムツシユ峰 ⑬

梵店主

よっちゃん達は、各自個人装備を背負い残りの登山装備類を馬2頭に振り分けて運ぶ事にした。来た道とは違うルートを選んで飛行場がある街ギルギットを指すのである。

無事登れたこともあり、なんとも言えない爽快感と達成感があった。ベースキャンプから谷沿いにキャラバンを続けイシュコマン峠を越える。石畳を積んだような瓦礫が果てしなく続くところを羊の糞と磁石を頼りに大まかなルートを選び歩いて行く。谷沿いの山々には雪を頂く峰々が散見出来るが、よっちゃん達が行く溪筋のキャラバンルートには雪渓も残っていないようになかった。

峠を少し下ると谷は大きく開けてきた。夏に羊の放牧をする為か石囲いを見たように見える斜面や窪地が谷間に見えた。圧巻に思えたのは溪谷の川沿いに野球場ほどの平地が広がり、牧草と思われる青い芝が一面に生え、岩ばかりの荒野を旅して来たよっちゃん達を驚かせた。そこには、対岸の岩山から流れ落ちる大きな滝があって、轟々と水しぶきをあげている見事な風景があった。

人影は全く見当たらず、不思議な世界に迷い込んだような錯覚を覚えた。

手付かずの大自然が残るカリフスタン渓谷は桃源郷のようにさえ思えた。ヒマラヤの山深く地図も案内書もなく人影の無い夢のまた夢のような旅である。

好きなところでテントを張り気ままに過すひと時は楽しい。二人のポーターはテント設営が決まれば馬の背に積んだ荷物を降ろしテントの横に集めてくれる。この荷を狼などに狙われないためにシートをかぶせる。ポーターたちは持参したトウモロコシの粉を水で捏ね、即席に作ったカマドで焼いて食べる。少し大きめの石ころを三個置いた上に薄く平たい石をのせて乾いた馬の糞に火をつけて燃やして石を温め粉を焼くのである。きわめて簡単で簡単な食事である。こんな楽しいロマンを感じる旅は二度とないだろうとよっちゃんは感じていた。

よっちゃんは考えた「なぜ山に登りたのか」心の奥底にある冒険への想いとは何か。

登る前と登った後はよっちゃんの想いに微妙な変化が起きていた。登る前は「死ぬかもしれない。怪我をするかもしれない。手足の一本ぐらいいは怪我しても仕方がないが、生きて帰れば儲けもんだ。いや死んでも文句を言ううまい…」未知の山に対する大きな不安や怖れに正面から向かって行く覚悟を切らさないように緊張の糸

を張り詰めていた。登山の核心部になれば更に緊張が強まり遭難事故への恐怖が瞬間的ではあるが消え死ぬことの怖れから解放される。その時、生きてる素晴らしさと解放感を味わうのである。

死と隣り合わせである事を自覚しそれを乗り越えようとする意思が死の恐怖心を一時的に消す。おそらく死をも怖れない心境になるのである。その瞬間、人は何ものをも怖れない自由な時間と解放感に満たされる。

しかし、その時間は短く、すぐに恐怖の虜になるのではあるが。その一瞬を味わい感じるために人は苦しく危険な山を目指すのではないかと考えた。

登り終わった後のキャラバンは気楽で危険が少ないから、緊張感も薄れるから登る前のような精神の高揚はない。だから心底楽しい訳ではない。登頂が成功した達成感はあるが、命がけて挑む張り詰めた心の緊張感はない。いつものような将来の仕事の不安や死なずにすんだ安堵感といった日常の葛藤が始まるのである。

世間の人は成功者を称え称賛するが、当人は挑戦する一瞬に生き甲斐や開放感を感じているのであって、その結果を問題とはしていない。一度その死の恐怖感すら忘れるような緊張感を持って何かに挑戦した人は、その挑戦が終った瞬間次の挑戦を考え出すにちがいない。

義兄とその家族 (25)

肺ガン闘病中の義兄は、この2月に60歳。無事、といえるかどうかは別として定年を迎える。その退職金1千5百万円が多いのか少ないのか、私にはよくわからない。「病気で休んでいても、しっかりもらえてええなあ」と羨ましく思うだけだが、姉は「キヨズミが病気になるてなかつたら、もうちょっと積んでもらえてたみたいやわ」と欲どしいことを言っている。

しかし、そう言いつつ、姉は、ややほつとしている気配だ。「休職もそろそろ限界やろうしな」。それに会社社員である、社会保険料など支払うべきものも結構多くて大変だったようだ。

義兄は、結婚した当初から、支払いも貯金もすべて姉任せ。専業主婦だが、これとお金の管理はプロフェッショナル並み。姉の特技と聞いていいだろう。こういう夫婦の場合、妻は夫に「お金がこれだけかかっている」「収入がないと困る」と報告したり、文句を言ったりするのかもしれないが、うちの姉は違う。「仕事なんかより命やデ」と言い、夫の肺ガンによかれと取り寄せているサプリメントや高級食材も、こそこそと本人に内緒で手に入れようとして、ときどきバレたりしている。「私がおれへん時にかぎって宅配便って届くねんやんか」

と姉は無念そうに言う。「全部、キヨズミの体のことを考えて買うてるもんやから、別にホンマのことを言うてもええねんけど、なんせ、(義兄は) 氣い小さいやろ。届いた箱の中の明細書見て、『こんな高いモノ、僕、いらんよ』と怒るねんもん」と愚痴る。だから、

「敢えて、過少申告することもあるようだ。『コレはいくらした?』と聞くから、『あ、それ? 千円もしてなかったかな』と言うたら、アホやから信じるねん(笑)。ほんまは9千8百円やっつけんどな」。ケケケと笑っている私の姉ちゃんは、極悪非道の女なのか、聖母のような妻なのか。

この間も、わけのわからないことを言っつて鼻の穴を膨らませていた。「水が大事やというのは知ってると思うけど、私はこのごろ、『財宝』をお風呂に入れてんねん」。お取り寄せのミネラルウォーター「財宝」が昨今の姉のおすすめだと前号に書いたが、それを浴槽にドボドボ入れている、というのだ。締まり屋で、お金は1円単位で管理する能力を誇る、私の姉ちゃんが! 夫と健康のためなら文字通り、「財宝」を湯水のごとく。

定年退職目前で、年金だって将来的に安定しているともいえない国なのに、この金銭感覚、間違っつてはいないのだろうか。

ついで、「あの、大丈夫なん?」と聞いてしまつたら、姉はカラカラと笑つて、「ジュンちゃん(息子)に遺すもんが減るだけやから」。

姉たち団塊の世代は、子供に遺すより、自分たちのお金は自分たちのために使おうという傾向があるのだろうか? 死んじやつて使い切れなかった分を子供にやる、みたいな? それとも、姉だけの特殊事情なのだろうか。息子の嫁があまり好きではない、という。しかし、この世のどこに、愛する息子の嫁が心底好きという母親がいるというのだ。息子の嫁に妥協できるかどうか、だけではないのか。姉は「妥協できない」組の姑だ。だから、極力寄せ付けず、孫は可愛くて仕方がないのだが、「嫁つきだったら、いらん」と、にべもないことを言っている、という

か、強がつている。私に対しては。だって、姉とて、一応、まっとうな人間なのふりをしなければならぬので、嫁には、まあまあフツの応対をしているのだ。「元氣なん?」と聞き、訪ねてくれば、いそいそと、お茶だ、お菓子だ、晩ご飯だ、ともてなす。何かの都合で、自分が作れないときは万札を渡して、「どこかで食べて帰つて」と送り出す。

ところが、である。私に向かって言うときは、無茶苦茶、辛辣だ。これか

ら書くことを、嫁のご両親が知つたら、非常に気を悪くされると思うので、ぜひ、ここだけの話にしといてほしいのだが(誰が、誰に、こんなしょうもない話をするかってことですが)、姉は私に「もし、私がキヨズミより先に死んだら、あの子らにええようにされんように、お金はいくらアンタが管理してや」と言うのだ。

そもそも、ガンなのは義兄で、キョーフの姉ちゃんはピンピンして死にそうにもないのに、何でそんなことを頼まれなければならぬのだ。でも、思わず、妄想してしまつたのも事実だ。姉の葬儀の日、「うるさいお姑さんが死んだ! さあ、お金、もらつとこか」と嫁が立ち上がる。その瞬間、私が両手を広げ、「ちよつと、待つてくれる!」と割つて入る。「それはキヨズミ兄さんのお金! キヨズミ兄さんが死ぬまで、そのお金に手をつけることは、死んだ姉ちゃんに代わつて、私が許さない!」。

いやいや、あくまで妄想である。すごい資産家でもないのに、長生きしてれば、多少の蓄えなんか、死ぬころには枯渇している。遺産相続をめぐるドラマじやあるまいし。

だのに、姉は結構、本氣だ。最初に、姉に、「死んだら、頼む」と言われた時は、「わかつた! 任しとき!」みたいなことを面白がつて言つてしまつたが、何

回か言われているうちに、私は弱氣になつた。「私に口はさむ権利ないんちゃうかな... 息子がいてるねんから」。

姉は、「ちつ」という表情で、私を見て、「だつてな、私が先に死んだら、キヨズミなんか、あの子らのいいなりやで。『お父さん、家建てるから、カネくれる? 一緒に住めるやろ』なんて言われたら、ホイホイ、有り金はたくデ。それで、無一文になつたら、『なんで、お父さんの面倒なんかみやな、あかんもん』って、ぼいっと捨てられるに決まつてるやん」。そんなこと、全然、決まつていないが、

姉は、大げさにため息なんかついちやつて、「キヨズミがみじめなことにならんように、それだけは頼みたいねん」。今度は、私がつめ息をつくしかない。

自慢ではないが、私は姉と違つて、お金の管理なんて、まるで、苦手だ。姉妹でも素質が違うのだ。そんな私に言えることは、ただ一つ。「姉ちゃんの方が(義兄より)長生きして」。

今、氣が付いたけど、こんなことを書けるのも、義兄が元氣になつてからだ。定年もおカネも憎らしいヨメも、生きていればこそ、の話である。

(AO)



米国時代 2 (78年12月、84年1月)

土田 裕

バーベキューパーティーをしたことがある。ミシガン湖は大変大きな湖なので彼女の実家まで車で2時間くらいかかったと思う。

リサ・コーザン(女) 大卒で二十四歳くらいだが、既に結婚していて旦那はまだ大学生でアメリカンフットボールの選手。米国ではアメフトは大変人気があり、有名選手は奨学金が貰えてただで学生生活を送れるのだが、彼女の旦那は花形選手ではなかったらしい。美人で仕事もよくできたが、旦那の分も稼がなければならぬので、入社後半年くらいで昇給の要求があり、その時のプレゼンテーションが非常に上手くしていたので、支店長の承認を得て特例として大幅昇給を行った。

邦人の若手担当者が自分のアシスタントとして使い、一緒に出張もしていた。他課の邦人担当者から「人妻なのに大丈夫？」と日本人的感覚でやっかみ半分の忠告があったが、同人に限らず、米国では担当者アシスタントと一緒に出張するのはよくあることで本人は全く気にしていなかった。キャシー・ダン(女) 新卒、二三歳で入社。こちらでも美人で性格は良かったが、頭はあまりよくなく営業は無理であった。ミシガン湖の周辺の町に彼女の実家があり、夏休みに物資課一同で

若手二人とも酒がめっぽう強く、二月のある夜、邦人二名とケン、この女性二名の計五名でピアノバーで飲んだ。誰かの誕生日祝いだったと思うが、女性二人が私にテキキラを勧めて何杯か飲んだ。口当たりが良いので最初は気分良く談笑していたが途中から全く記憶が無くなった。

翌日朝、自宅で眼が覚めたら泥にまみれた衣服やカバンが居間に置いてあった。妻の説明によると「ケンが車で送って来た。ピアノバーを出たときからまともに歩けず、雪道でなんとか転んだ。それでも自分で運転して帰ると言い張っていたが、危ないので送って来た」とのことであった。私の車はピアノバーの前の道で停めたままであり、翌日引取りに行ったが無事であった。

ところで米国では道路交通法も州によつて異なりシカゴのあるイリノイ州では当時、飲酒運転は禁止されていなかった。従つて冬の寒い時期は会社の地下のバーで一杯飲み、ほろ酔い加減で車を運転、帰宅していたのだが、なにか危ない目にあつており、今では反省している。

住居

転勤して最初にやらねばならぬことといえば住居を決めること、車を買うことである。米国三井物産にはドイツ物産のように会社が借り上げ住宅を斡旋してくれる制度がなかったので、前任者が借りていた家をそのまま引継いだ。その家はシカゴ郊外のグレンビューにあり、家主はティモシー・タンという中国人であった。彼は台湾からの移民でシカゴ市役所に勤務しているとのことであった。英語はお世辞にも上手とはいえず、それでも市で雇つてくれるのは技術者として何かの資格を持つていたのだと思う。半年後、ウイلمット(グレンビューの隣町でそれよりやや高級な住宅街)に新しい家を買ったのでそちらに引っ越さないと言う。下見をしてみると大きな庭があり、

野生のリスもいたので気に入って越すことにした。彼は米国に来て一〇年そこそこで自分の家を含めて3軒の大家になったわけで、会社を経営しているわけでもないのに中国人は偉いと感じた。彼は大変な儉約家で貸家の管理・修理は殆ど自分でやっていた。例えばある時、豪雨が降って地下室(その家は地下にリビングがあり絨毯も敷いていた)が水浸しになったが、彼は業者を頼むことなく、自分で業務用ク

リーナーなどを借りてきて2日がかりで綺麗にしてくれた。蒲公英(たんぽぽ)は日本では庭で咲かせていても文句は言われないが、アメリカではわたが飛ぶ前に根こそぎ除草しないと近所から文句を食らうことになるのだが、彼は「早く除草するように」と口うるさく注意していた。また「中華街で食事に招待したい」と言うので勇んででかけて行ったところ飲茶のブランチだった。

ウイلمット・スコーク地区は「ホロコースト」というTVドキュメンタリーでとりあげられたが、ユダヤ人が多数住んでいて、最初の家の隣もユダヤ人であった。アメリカにいるユダヤ人には大金持ちもいるが、一般のユダヤ人は質素な生活ぶりであるが、一般のユダヤ人は必ず一日中庭仕事をしていた。小さな家で庭も小さかったので女房が「いったい何をして時間をつぶしているのだろう」と訝った。

オールド・オーチャードというショッピングセンターが近くにあったが、歩いたら一時間くらいかかるので、当然のことながら車は私の通勤用と女房の買い物用の2台必要であった。私の車はシボレー・カプリスの新車を買ったので問題なかったが、女房にはシボレーインパラの中古車を買った。この中古がひどいボロ車で度々故障して大変苦労した。

当時から日本車の方が故障も少なく、燃料効率も良いことは分かっていたが、当時

はトヨタも日産も米国内では生産しておらず、日本からの輸入車を販売していたので価格が高かったのと、折角アメリカで生活するのだから大型のアメ車を乗り回してみたいという気持ちもあり米国車を買ったのだが、故障も多く、燃料効率も悪いので結局高くついた。

子どもの教育

ハンブルグに居たころは子供が小さかったので（帰国時、娘が4歳半、息子が1歳）、学校の心配はなかった。家族がシカゴに来た時、娘は七歳半、息子は四歳だったので

当然のことながらまず学校の手配をする必要があった。シカゴには全日制の日本人学校はなく、土日だけ開校する補習校があったので、平日は、娘は近所のロモナ・スクールという小学校、息子は五歳からロモナ付属のキンダーガーデンに入れた。

心配した言葉の問題については、入学当初から、バイリンガル・スクールと称する外人専用の英語を教えるクラスへ毎日午後に通学していたので、スムーズに現地に溶け込めたと思う。転居してすぐ地域のボランティアのおばさんが来て、近くのスポーツセンター、ゴルフ場、魚釣りに良い池など細かに教えてくれた。私自身、仕事が忙しく

て子供が学校で何を勉強しているのかも知らず、PTA活動も女房に任せきりであった。シカゴ市内の学校に比べると郊外の学校のレベルは高いといわれていたが、日本と比べると授業が易しいのか成績は良く、先生が気持ち悪いくらいべた褒めすると女房が言っていた。

一般にアメリカの公立学校の先生は子供を叱るより褒めて長所を伸ばすのを教育方針にしているらしい。多民族国家のアメリカでは愛国心をことの他重視しており、そのためか毎日、授業開始前に胸に手をおいて国歌斉唱を行っていた。ハロウイン（収穫祭）にはクラス全員のお菓子を準備して学校へ持って行く習慣があり、そのうえ「トリック・オア・トリート（御菓子くれないといたずらすよ）」と言って変装した子供が家々を回る。休みの日には自家製のレモン水を道端で売って小遣い稼ぎをしたり、日本の様に塾も無いし近所の子供たちとのびのびとした学校生活を送っているようであった。たいいての日本人は子供が中学生になると先行帰国させて高校受験に備えることになるが、シカゴ郊外にニュートリア高校という優秀な公立校があり、ここに入学すれば帰国子女枠で日本の大学にも比較的容易に入れるとのことであった。

「芥川だより」懇親会のご案内

世の中捨てたもんじゃやない

私の性格は危うい持続力でもって何事においても中途半端に投げ出す自滅型である。この無責任な私が「芥川だより」を発行し続けられたのは奇跡でなく、多くの人の助けが成せた必然と考えている。

無理な原稿依頼に徹夜もいとわず書いていただいた人。毎回二十部数を友人達に郵送される人。毎月店頭にわざわざ来てお金を払って下さる多くの方々、ネットで見て下さっている人。たくさんの人から助けをいただき、支えられて来ました。創刊した時は、「2年間だけは続けよう」と糀花さんと相談して始めました。24号まで続けて打ち上げパーティーをして終わりにしようね、と幾度となく言って来ました。しかし、やめる事が出来ませんでした。いくつかの理由があります。

90歳で独り暮らしをされている爺さんからハガキをもらいました。そのハガキには、「私は芥川で生まれ育ち仕事柄離れて暮らしていましたが、歳いって、また芥川の近くに住んでいます。芥川だよりを発行される苦労は大変と想像しますが、毎回楽しみにしている老人がいると思ひ続けて下さい」

という、こんな文面が書かれていました。

また、挿し絵を書き続けて下さった平木さんも毎月店へ下原稿を取りに来て熟読し浮かんでくるイメージを何枚もの絵にして届けて下さいました。引越されの間際まで長く続けて下さいました。

龍さんは「店をやめるまで続けよ、たとえ小誌であっても出版物は公器である。その事を自覚してやれ、廃刊するまで協力する」と幾度となく励ましてくれました。

これまでいろんな人から物心両面で支援を受けてきた。これだけの暖かい思いがあっても、発行し続ける情熱が冷める時があります。いくつもの葛藤が常に背中にあるのです。これは私の根性無しの性格のせいなのですが消えません。

危なっかしい人生を生きて来て、私に誇れるものがあるとすれば、この「芥川だより」しかない私をよく知る先輩は言います。その通りだと自戒を込めて思います。みなさんの思いが幾重にも重なり込められた活字が私を励ましてくれます。人はひとりでは何も出来ない弱いものだが、集まればアイデアも力も湧いてくる。人生は人との出会いが一番だ。まあ、こんな事を思いながら時は過ぎて行きます。きたる2月19日、「読み書きのおもしろさ」の話題を肴にして多事争論をやりたく思っております。ご都合をつけてご参加される事を期待します。

永遠なれ！ わだつみのこえ（続々）

具志 清

松永茂雄『学徒兵の手記』より

松永茂雄 一九一三年（大正二）四月三十日 日生。東京都出身 一高中退後、陸軍に入

させたという戦国の武将の故事を思ただ君が『暁と夕の詩』の装幀に夢中にい浮かべながら、時に社会科学を論じ、時に、定家の芸術を語った。くりかえしくりかえし…いつできるかもわからないものを夢みています。

『きけ わだつみのこえ』には第二集がある。一九六三年『戦没者の遺書にみる五年戦争』として刊行したものを、『第二集 きけわだつみのこえ』と改題し、一九六六年に出版された。私の手元にあるのは、学徒出陣六十周年を迎えて、二〇〇四年に増補改訂された新版である。本書には、四十五名の手記がある。うち九名は、双方にその手記が掲載されている。

ドイツの行き方が現在最も力のあるものだとすることは疑いないが、私はドイツ文化がフランス文化に代わって世界を指導するものとは考えられない。ドイツの行き方が日本に多くを教えるだろうけれども、私は日本がドイツと同じ途を行くことには反対である。

（『学徒兵メモ』より）

この人は、詩も書き残している。その中の一つ、十三行詩を転記したい。

まず、プロローグの十四行詩の、はじめの四行を書き移したい。

（『灰色の背の手帳』より）

美しい虚構

戦友たちの手紙の中には虚構がある

「軍服着た間は学問を忘れたら」との忠告に、「軍服着たって学徒で候」と返事した。知性が私の武器である。

美しき虚構

学徒は真理の使徒である。学徒の愛国は

国家の真実を譲ること。学徒の魂は真実の

立原道造氏への手紙

すべてのは虚構の中から生まれ
そして虚構のなかに死んでいった

ない国家よりも、国家のない真実を求め
る。君からまだ一度もおたよりがないので不安にも淋しく思っております。三好さん、津村さん、保田さん、などご近状おしらせください。堀さんの『かげろふの日記』はどんな評判ですか。僕はこうしてくらし



人間の知性や感情をなくしてしまうといわれる激戦や強行軍の間にも、私の文学論や人生論に耳を傾けてくれた一人の真面目な小隊長があつた。

私は陣中で源氏物語や古今集を講義

出も浮かんで来ないし、おもしろい
從軍記もできそうにもありません。その別れはそれよりも哀しかった



友だちでいようね いつまでもいつまでも

一九三八・八・十七
これはソネットにならない

この人が、この詩を詠じた頃は、場所は何処だっただろうか。最前線ではないにしても、日中戦争が一年を過ぎた時期である占領地に於ける中国少年との束の間の平和のふれあいが、偲ばれる。その後、この少年は、どうなったであろうか。私と同世代である。日本軍に蹂躪され尽くされた、あの大陸の中を生き延びつつ、かつて親しく交わり、「友だちでいようね いつまでもいつまでも」と言っていた敵国軍人を懐かしく想ったであろうか。しかし、その詩人は、それからわずか三カ月余に戦病死している。

因に、ソネット(十四行詩)は、この人の盟友、立原道造が愛用し、名詞を残した。彼らの六、七年先輩の中原中也が、ソネットの優れた先駆者であった。中原中也賞の第一回受賞者が立原道造である。この人の『詩』は十三行である。その詩才を以つてすれば、一行補足するのは造作ないことだろうが、敢えてそのままにし、「これはソネットにならない」と、付記したのは、詩そのものの優劣よりも少年との惜別の情を詠うのに、意を傾けたことを言いたかったのだろうか。

「潯陽江頭瑟瑟々の秋」は、盛唐の詩人白樂天の七言長詩『琵琶行』に拠る。白樂天が潯陽江のほとりで友人を送る時、ふと琵琶の音を聴いた。弾き手は、かつては宮廷に遣える名手、今や落魄の女で、ここで要約するのは難しい。ただ、この人は、少年との別れに際して、その思いを白樂天の詩に重ねたのであろう。この詩、そして書き残したものを讀むと、惜しみても余りある文才を感じる。

樺 文雄 一九一四年(大正三)八月十四日生。山口県出身。成蹊高校、東大法学部 一九三七年三月卒業 住友機械工業に勤務中、一九三八年十月、陸軍に入隊 一九四三年四月六日、召集解除後病没。陸軍上等兵。二十八歳

この人は、昭和十四年の十二日分の日記が採用されている。その中の一日分を転記したい。

(「陣中日記」より)

二月一日

寒し。今晚から不寝番は六人ずつ交代で一晩を受け持つことになった。今まで毎晩あつた不寝番がこれによって四日おきぐらいになるというのだが、結局とうとうと朝をみかえた。T伍長が酔っていた。ふらふらと立

硝中の僕のところにやって来て、硝中の僕のところに来て来て、

「やあご苦労。どうだ軍隊というところに慣れたか」という。

「だいぶ慣れました」

「慣れたのか、慣らされたのか」

「両方であります」

「両方?じゃ少しは反抗心があるな」僕はドキツとした。

「君なんか高等教育受けているんだが、全く馬鹿らしいと思うだろう」一番触れられたくないことだ、僕は黙っていた。

「黙っているね、そりや馬鹿らしいだろう。矛盾だらけだと思っだろう。え?」僕は仕方なく答えた。

「何の社会にだって矛盾はあります」

「うん、まあそういう認識をもつていれば、俺も安心した。今日は少し酔っているんだ、失敬なことを言ったら許してくれよ。ああ寒い、おい、寒いだろう?」

T伍長はゆうゆうと士官室のほうへよろけて行った。

「戦略暗く…か。」その後ろ姿を僕は見送りながら、何か言い足りぬ寂しさを残した。

月がこうこうと照っている。僕は剣を抜いて光を受けてみた。

私は、映画の一シーンを観る思いがした。すばらしい情景だ。簡潔な文章は、そのまま短編の一節にもなる。

最後の一行が秀逸だ。この情景の一学徒兵の心情を、どの様に解釈したらいいのだろうか。T伍長は歴戦の勇士であったであろう。その短い言葉の中に、高等教育を受けてきた学徒兵への畏敬の念が感じられる。部下思いの善良な下士官だったであろう。

松原 成信 一九二二(大正十一年)一月十一日生。滋賀県出身。同志社大学予科を経て、一九九四(昭和十九)四月、同大学経済学部進学、六月二十五日、陸軍入隊 一九四五年八月一日、北京にて戦病死。陸軍兵長。二十三歳

この人の、短い手紙文が、この第二集のエピローグとなっている。

昭和二十年一月二十九日(友人への手紙より)

頭の透明な時間は、ほとんどありませんが、それでもまばゆいくらいな一条の白いたていとがあるようです。

生あらばいつの日か、長い長い夜であった。星の見にくい夜ばかりであった、と言い交わしうる日もあるか…

死の半年ほど前の手紙である。病床で書いたのだろうか。そして「生あらばいつの日か」友と語り得ることを信じてい

たであろう。しかし敗戦二週間前に二十三歳の短い生涯を閉じた。

私は、この文章を書くにあたって、若年のころ読んで感動した『きけ わだつみのこえ』を、再び読んだ。そして感動を一層深くした。その感慨を、完璧に表現できないもどかしさを痛感している。

採録された百十二名中、七名の学徒兵の手記を、転記した。もっと書かせてもらいたかったのだが、そうもいかなかった。ただ、特に若い人たちへ、もし未だ読んでないのであれば、是非とも『きけ わだつみのこえ』を繙くことを、切に願う次第である。

最後に、本書の巻頭の詩と扉の短歌をあらためて讚美し、この文章を終わりたい。初版刊行の際、東大の渡辺一夫が、「感想」を書いた。その終わりに、ジャン・タルジュ（フランスの詩人。レジスタンスに参加。一九〇四―九五）の詩人を訳した。

「若くして非業死を求めさせられた学生諸君のために、僕は、心から黙祷を献げたいと思う。

死んだ人々は、還ってこない以上、生き残った人々は、何が判ればいい？

死んだ人々には、慨く術もない以上、生き残った人々には、誰のこと、何を



七つボタンの制服に着替える予科練

「芥川」考 (補遺)

大江雉兔(おおえちつと)

つらつら書きつないできた「芥川」談義は前回で終了なのだが、最後に「補遺」として、あと一回だけ付け加えておこう。これまでの話を簡単にまとめると、古代の物語には、うわべのストーリーとは別の可能性が見出せることもあるという話だった。『伊勢物語』第六段、通称「鬼一口」の段では、歌枕「芥川」に注目することで、見えなくなったその流れを浮かびあがらせることができる、ということである。その結論をうけて、明確なストーリーとして組み立てられることなく、可能性のまま消えてしまった伏流水をいま一度、明るみに引き出してみようというのが、今回のテーマである。

「鬼一口」の段は、表向きのストーリーは、名前の伏せられた男と、男にとって手の届かない女との間におきた悲劇である。男は女を連れだして逃げたが、逃亡劇の途中で女が鬼に食われしまったとか、女の兄たちに見つかって奪い返されたとかの形になっている。ところが、そこへ歌枕「芥川」の持つ「飽く(嫌になる)」の響きを重ねると、何かの理由によって二人の間がうまくいかなかったり、それを嘆く女のささやきが世間に漏れ聞こえてきた、そんなあたりが一番の

核心ではなかったかと想像できるのである。

二人の間にあつたこと、その真実は何も分らない。だが「男」としか書かれていなくとも、それが在原業平で、女は藤原家の息女・高子であるとの前提で『伊勢物語』は読まれてきた。その文脈なら藤原基経・国経らが権勢をカサに露骨なイヤガラセを加えたことで業平の通いが途絶え、事情を知らない高子が一人で嘆き悲しんだといった方向への想像も可能となる。斜陽の名家・在原家と権勢誇る藤家の娘との間に起きたことなから、スキヤンダラスな風合いで噂されたに違いないし、権力者の顔を伺いながらの噂なら、焦点がぼけていたり、わざとらしく筋立てが変えられたりするのは、なら不思議ではない。明確な史料がなくとも、わざと焦点をぼかしたような物語が伝わっていることで、そこにながしかの事情をかぎつけてしまうのである。

言葉の上のみでぼかしがなされることで、読み手の脳裏には事件がより鮮明に浮かびあがるといえば、類似のケースは多々見受けられる。『仮名手本忠臣蔵』はその典型だろう。足利の時代だといいい、言葉の上では「塩冶判官高貞」だの「大星由良助」だの言ったところで、観客は浅野内匠頭長矩と大石

ある元高校教師の悲劇と死 後篇

海彦山彦

内蔵助の姿を重ねて喝采を送った。幕閣を名指しにして悪者扱いすれば、その逆鱗に触れるのは間違いない。そのため変名を使ったのだとされるが、結果としては、元禄の討ち入りを永久に語り継ぐこととなった。

あるいは成島柳北のイタズラもその一つだろう。明治の初め、朝野新聞で成島が「井上三郎」と「尾崎毅」なる人物をでっち上げ、その小物ぶり、陰湿ぶりを嘲ったことがあった。これは讒謗律(新聞に対する言論規制の法律)の立案で中心的役割を担った井上毅と尾崎三良を愚弄するもので、読者をおおいに笑わせた。尋問を受けた成島は「井上三郎」「尾崎毅」の両人はかつての幕吏、まだ生きているはずだから捜してみたらどうだとぼけとおしたという。

『仮名手本忠臣蔵』や成島柳北のケースは、時代的にも近く、周辺の資料もたくさん残っている。そのため、ぼかされた輪郭は容易に再現できる。それにに対し、はるか古代にまでさかのぼらねばならない『伊勢物語』の場合は、裏付けになるものは皆無、言葉の端々に微かな臭いが漂っているだけである。歌枕「芥川」は、まさにそんな臭いのする言葉なのである。そんなところから想像の翼を広げるのも、『伊勢物語』の楽しみ方である。

中編で書きもらしましたが、山内さんは裁判を受ける前に、県の教育委員会から教員免除を剥奪されています。教育委員会は好きなマスコミ報道を鵜呑みにして、彼を犯罪者と決めつけていました。夫人の自殺に至る山内夫妻の病苦が全く考慮されていませんでした。

放送当日から山内さんのブログのアクセス数は1500以上に跳ね上がりました。早稲田の野球部関係者や彼の裁判に嘆願書を送った化学物質過敏症のメンバー、スパーモーニングを見て衝撃を受けた人々から多くの共感と同情が寄せられました。

その番組で顔を見て、早稲田の山内さんだと分った人がいます。兵庫県姫路市で浄土真宗善教寺の住職をしておられる結城思聞さんです。僧名で思聞さんと言ってもわかりませんが、長年フジテレビで野球中継やプロ野球ニュースの司会をしておられたアナウンサーだった松倉悦郎氏です。山内さんとはあまり面識がありませんでしたが、同じ早稲田の大先輩で野球が大好きな人です。

後に山内さんの急死を悼んで『野球

の定石』の出版に尽力されることになりました。

私は山内さんのブログに集まる多くの人に、「化学物質過敏症は、自殺された山内夫人のような症状だけではなく。化学物質過敏症では極微量な化学物質の臭いに反応して苦しみ、その原因に気付いて嫌がる人も多い。しかし、逆にその臭いを好んでしまい病気の原因になっていくことに気付かない人々も半数以上いる」と訴えました。「その人たちは医学界に理解されないまま薬物による対症療法しか受けていない。その最たるものが大人の精神疾患であり子供達の発達障害なのだ」と。

山内さんは当時それらのことをアレルギーの本当の姿だと考えていなかったと思います。でも、なぜか彼は特別に私の主張をトピックとして取り上げてくれました。それは、次第にブログのやりとりでわかるようになるのですが、彼の女性の友人であるハンドルネーム「かっちゃん」の子供がてんかんと軽度の発達障害だったからです。

私は思い切り、アレルギーと化学物質過敏症の説明を書きながら、母親であるかっちゃんを説得しました。そして京都には鈴木富美医師と大阪には吹角隆之医師という真のアレルギーを理解する医師がいるから、絶対受診させるべきだと書きました。山内さんの誘

導と私の説得で、ついに彼女は大阪の吹角医師を訪れたのです。その流れは山内さんのブログに今でも書き残されています。

山内さんは、そのころ朝早くから夜遅くまで岩盤浴のサウナの従業員として働いていました。吉田拓郎の大ファンで、スナックにいけば拓郎の歌を歌いまくっていたようです。そして尽きることのない野球への情熱は、高校の教師に戻って野球の指導に打ちこみたいと望んでいました。ある機会に訪れた成蹊高校の並木道の美しさに惚れて、「ああ、この高校で監督をしたい」とブログに書いたことがありました。そしてなんとその記事が成蹊高校の監督が偶然にも読んでいたのです。しかも後から知ったのですが、奇しくもその監督が早稲田の同窓であり知人であったのには私自身も驚きでした。しかもその方は春に校長就任のため監督を退任する予定になっていたのです。

思いがけない成蹊高校野球部監督からの打診で、晴れて4月からは新監督の就任が約束されていました。また名前は出せませんが、かっちゃんから紹介された友人との再婚も話が進んでいたようです。長い厳しい冬はまさに春へと変わりはじめ、彼を暖かい風で包もうとしています。

しかし2009年2月11日、彼は過労による腸間膜内出血で突然東京のアパ

トで孤独死されてしまいました。彼の死を発見したのは、前日の電話から彼の体調の悪さと当日に連絡が取れないことに悪い予感がして、京都から東京まで駆けつけたその恋人でした。

既に亡くなられていたことも知らずに彼のブログに投稿していた私は、友人代表として数日後に掲載された訃報を信じられませんでした。悪い冗談だろう、何かの間違いだらう、と思ったのです。しかしかっちゃんからメールがあり事実だと知りました。

なんてことだろう！ 化学物質過敏症という理不尽な病気で生き地獄を経験してやつと立ち上がり大好きな野球をやるうとしている彼に、妻のために、化学物質過敏症患者のために、友人のために尽力してやまなかった誠意の人がなんで無残な死に方をしなければならぬのか。知らせのあった日に私は仕事をしながら涙にくれました。

山内さんの残酷な死に衝撃を受けたのは、野球部の方々や化学物質過敏症関係の方々だけではありません、結城思聞氏もそうでした。早稲田野球部に繋がりがあり、スーパーモーニングで山内さんの苦境とその人生を知っていた思聞さんは、以前よりうわさで聞いていた山内さんが残した野球指導ノートを自費出版されることを思い立ちました。

山内さんの人生はまさに「野球」です。

子供のころに野球と出会って高校・大学と野球一直線、早稲田大学に進学したというより早稲田大学野球部に進学されたと言うほうが正解の人です。「一本気」とい言葉がまさにふさわしい人でした。

彼は高校時代から常に野球の練習や試合で気付いたことをノートに記録していました。結婚後夫人の病状が悪化して部員の練習に費やす時間が少なくなり始めると、そのノートに練習方法や実践での注意、攻略法、精神論などを書いて活動の補助としていたそうです。年月が進むに従ってノートは膨大な冊子になり、彼はそれをまとめて「野球の定石」と名付けてワープロで打ち直し、解説図を入れて自ら製本して現役に配っていたのです。滋賀県内の相手チームについても仔細に調べ、あの監督ならこのような試合をするだろうとパターンを予測していました。特に素晴らしいと絶賛されたのが「パーフェクトスクイズ」だそうです。彼はそれを部員だけの秘密事項と門外秘としていましたが、大学時代のOBらに密かに読まれ実践の参考書となって本人の知らないところで広まっていたのです。

それが「野球の定石」なのです。思聞さんはその「野球の定石」を山内さんの生きた証として残そうと思われたのです。高野連奥島孝康会長に刊行会会長をお願いし、早稲田大学学長や体育

会関係者とそのOBに寄付を仰いだところ、わずか10日で70万円を超す金額となりました。とんとん拍子に2009年11月、1000部が自費出版されました。『野球の定石』は評判がよく地方紙やスポーツ紙、週刊誌、ネットなどに載せられたことから、第3版600部増刷となりました。

思聞さんは有り難いことにその収益金を「山内基金」として化学物質過敏症認知のための講演活動の資金として患者会に寄付されました。既に初回の講演が2010年に東京で開かれています。

また山内さんは無くなられる数カ月前にかっちゃんと連絡を取り合って、吹角医師の講演を企画していました。彼の死後、先生の講演がその年の5月に京都で開かれました。次の年かっちゃんから先生の治療が功を奏し、子供のてんかんの発作が無くなりもう薬を飲んでいないこと、普通級に進んで今は少年野球で頑張っているとの朗報を得ました。まるで山内さんの魂がその子に乗り移ったようです。どうか山内さんの分まで幸せになってくれと心で祈りました。そして山内さんなら必ず行けた甲子園に行つてほしいと。

1年たったある日、彼のブログに投稿がありました。

政治さん、わたしです。今はどうしていますか？

あちらで野球してますか？

三回忌の法要は松倉さんが来て、導師をしてくださいましたね。結婚するときは松倉さんのお寺でお願いしようと言っていたのが懐かしいです。おじさんやいとこの皆に、お兄さんのお孫さんも来てくれて、とても暖かな良い法要でした。わたしは今日の青空のように澄んだ気持ちで今でも政治さんの思いをしっかりと抱きしめて暮らしています。

今日から選抜が始まりました。高校生たちが頑張っていますよ。日本は震災で大変だけど、皆頑張っています。私も頑張っています。いつも電話の時に言ってくれていた言葉をあなたの声とともに思い出します。ふとここにきたらあなたに会える気がして。



リハビリ 2

左肩のリハビリが長引きそうである。自分で肩を回したり、電車の吊り革にぶら下がったりして治療していたつもりだった。しかし、中々、良くならないので整形外科医に診て貰った。まずレントゲンを撮った。

「なぜ半年も放って置いたのですか」と諫められた。

「鎖骨のひびを直して、痛風を直して、胃潰瘍を治しました。ひとつずつ順を追って治療してましたので」と私は言い訳した。

次にカルテを持ってリハビリ室に行った。

「重症ですよ。筋が堅くなって短くなってます。リハビリは放置していた期間の三倍はかかるものです」とリハビリ師はそう言った。

『筋が縮むとは考えもしなかった。筋肉が固まっているとばかり思っていた。治るまで一年以上かかるかも知れない。馬鹿なことをしたものだ』

失敗の原因は二つある。

一つは最初にリハビリ施設のない医院で診て貰ったことである。

「鎖骨のひびは治りました。もう通院しなくて良いでしょう」と言われて安心した。

痛みは残っていたが「徐々に無くなるだろう」

と思った。それから我流でリハビリを始めた。これが判断ミスだった。直ぐにリハビリの専門医にかかれれば良かった。

もう一つは過信である。

「肩のリハビリぐらい人の世話になる事もない。自分で出来る」と舐めていた。

『人間は謙虚でなければ、より良く生きれない』

肝に銘じる。
 《龍》



『富士日記』

武田百合子は言葉を紡ぎ出す天才だと思ふ。彼女の文章に魅せられて、熱狂的なファンになった人も多い。デビュー作は『富士日記』、刊行は、昭和五十六年（一九八二）だから三〇年前である。いまでも多くの読者を得ている。

『富士日記』は、富士山麓に建てた山荘で夫の泰淳と花子と共に過ごした日常を記した日記である。時は昭和三十九年から昭和五十一年、日本が高度経済成長をつづけ、経済大国になる時代である。昭和五十二年の田村俊子賞を受賞している。

のびのびした文体で、読後はずがすがしい。断片的になるが、生き生きした文章を読んでみよう。

昭和四十年五月八日（土）晴

：梅の葉が大きくなっている。庭の斜面のサクラは開きはじめ、二階から見下ろせる北側の大きな古い桜が満開。丁度いいときにやってきた。

昼 タンメン、上に野菜いため、たくさんのせる。

私は三時ごろよりひるね。夜ごはんも知らないで、次の朝まで眠り続ける。主人、死んでしまったかと思つて、さわつてみたという。

七月十九日（月）快晴

：河口湖にしては、大へん水が澄んでいて、釣りする人も絵のようにしずかに動かない、うっとりするような真夏の快晴だった。〈こんな日に病気の人は死ぬなあ〉と思ひながら車を走らせていたら、梅崎さんが死んだ。：

帰ってきてずつと、ごはんのときも、誰も口をきかない。主人も私も花子も、別々のところで泣く。主人は自分の部屋で。私は台所で。花子は庭で。

八月十七日（火）晴

：ボートに乗る。岸づたいにはこれがない、人のいない熔岩の入江に舟を着け、水着をもつてこないので、主人真裸になって湖水に入り泳ぐ。水は澄んでいて深く、底の方は濃いすみれ色をしている。ブルーブラックのインキを落としたようだ。そのせいか、主人の体は青白く、手足がひらひらして力なく見える。私は急に不安になる。私も真裸になって湖に入って泳ぐ。

十月二十三日（土）くもり時々晴

：本当に今日の紅葉はすばらしかった。西湖の南側の山も根場村の手前の岩山も樹海の中も。赤いのはうんと赤く、黄色いのは、これ以上無理というほど黄色くて、絶頂の美しさだろうと思ふ。

深刻に考えない

私は、現代八〇歳の後半にさしかかっている。「ああ、歳をとってきた」と声には出さないけれど、自分で自分にいいきかせている。

振り返ってみると、五十代の半ばから口に出し、六〇代には日常生活の中で、これまで想像もしなかった出来事に反応し落ち込んでいた。

六八歳にして初めて手術をし、入院すること二ヶ月。いろんな難しい状態にあっても、老いを自覚せずにあせりばかりで失敗の繰り返しであった。

七〇代になった頃から「古い」を素直に受け入れるようになってきた。体の動きもスローになった。あの時は、こんなこと位出来たのにと未練がましく思った。でも歳と共に見えてきたものがある、と考えるようになった。

物忘れも多くなってきたが、いたづらに落ち込むのではなく、そのことによって自分も困らないように、他人にも迷惑をかけないようにするにはどんな方法があるのかと考えるゆとりも出来てきた。

毎日単調な生活が繰り返せること、そのことが幸せなのである。どんな小さな事でも私の心に温かさを

灯してくれるものや人がいることにも気がついてきた。

やはり七〇代、八〇代の老いは違うのだ。八〇代といっても、人それぞれである。その人の歴史というか、健康、家族関係、経済問題も含めて違った道を歩いている。そうした背景には、ものの考え方、日常の過し方ひとつで大きな違いが出てくることも、今少しづつ分かってきた。これが歳をとってから分かる幸せでもある。

病院

もう二〇年を経るだろうか。月一回病院の門をくぐる。でも「怖い」。なぜ怖いのか。

病院に一歩足を踏み入れたが最後、自分の意思、感情はどこかへ飛んでしまう。

「一回検査してみても」と顔を見る。その必要がない事が分かっていても「物」となってしまう。この歳になってといわずもがな。「結構です」あっさり拒絶する。自分の態度にあきれる。

現代の医学は人間を物として考えることよって進歩したと思う。医学が関心を持つのは病人ではなく「病巣」なのだ。当たり前でしょう。それが病院なんだからと人は言う。

個人医院だけれど、いまだに尊敬し信賴してかかっている内科医。

耳に付けた聴診器を病人の身体に当てて、目には見えない人の身体の中を、じつと耳をすまして皮膚や色つやを見、その触覚を通じて肉体の異常、訴えを聞きとろうとする。医者なればこそその深い沈思の表情を見るとき、私は言うに言われぬ尊敬と信頼感を持っている。

病気を治すのは医師と薬だけではない。半分は病人自身の治そうとする気力だという。

だが、その気力は医師との信頼感によつて呼び起こされるのではないだろうか。

「よろしい。はい、大丈夫」の医師の一言がどれだけ患者を慰め力づけるものか。

データと、にらめっこして患者の顔もろくに見ない医師は、それを知らない。これが年寄りの心配なのだ。



俳句

土田 裕

- 春月や菰を解かれし松の上
- 鶯の声に目覚むる旅の宿
- 青竹の撓う形に春の雪
- 多摩川の水の膨らみ春浅し
- 店売りの盆梅ははや満開に

編集後記

あつというまに二月になった。年末から正月にかけて酒も飲まず食も控えつつましく暮らしている。忘年会・新年会も出来るだけ断わつたが、断わりきれない会があつて出るが、酒が飲めないつらさを痛感した。

しかし、今度の懇親会だけは、少し呑もうかと考えている。糶花さんからもらつたワインもあるし、〇さんからもカンパ金を頂いたし、ささやかでも賑やかにして楽しみたいと思つています。二回目になります。ユニークな参加者が幾人もありますから、最高におもしろい会になる予定です。

芥川だより懇親会

2月19日(日)

11時～

於、芥川商協会館

皆様のご参加をお待ちしております

なお店は、当日、19日は臨時休業いたします。

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~